

釣りに釣られて

高原英夫

第五回 「釣る？釣らせてもらっしょ？」

釣り師は釣りをする行為、仕掛け作りから始まり、実際に魚を釣るまではあれこれと講釈は言えるが、釣果となるとあらかじめ責任は持てない。結果が出てから、大漁だったのはあの訳だ、不漁はこの訳だと言ってはみても、何十年やつてもこれだということは未だにわからない。要するに釣りという行為の様々が好きではまっているのだ。その日の船に乗ったプロの漁師さんに、いわゆるその日の釣果が、潮が悪くてとか、風が悪くてとか、いろいろのたまわれても、ごもつともとしか言いようがなく、翌日会社でオウム返しに語り、釣り師の面目だけはなんとか保つこととなる。

しかし、そんな中で、この船頭さんだけはちよつとどころでなく違う。今回はそんな話だ。

その日は、ソイ・テンカラ釣りだった。南西から風が吹き、潮は下り潮で、日本

海を歩くくらいの速さで流れていた。それに逆らうように船はほんのわずかのスピードで進む。差し引いた分だけゆつくりと北に船は流される。底についたオモリを、根がかりしないようほんの少し巻き上げると、エサは底すれすれの所を次々とポイントを変え流れることになる。魚の前をエサが通り過ぎようとするその時、食いつくか、つかないか、単純にいえばそれが釣りのすべてだ。要は魚のいる場所の、その鼻先にエサを差しのべる。あとは魚の気分だからどうしようもない。

どの漁港の何という名の船頭さんか、この文中で毛頭言う気はないが、彼は我々にまさしく魚の真ん前にエサを降ろさせてくれる。仮にこの船頭さんをIさんとしておこう。これもケモノヘンがつく釣り師のNさんが誘ってくれて知り合ったのであつて、私がこの口からベラベラ言うようでは釣り師の風上にも、いや海上にも置けないということになってしまう。

今、彼とのもとの出会いを思い出している。義父の葬儀があり、Nさんは下足番をやってくれていた。もちろんNさんとはそれまでも仕事上の付き合いもあり

知っていたが、その場で何かの拍子で釣りの話となった。タイの夜釣りだという。津軽海峡へ出るのだという。

「行くべし」

すぐに決まった。私は親族席にしながら、不謹慎にもすでに津軽海峡に浮かんでいた。十数年前の話だ。

そんなわけで、十月の初め頃からタイ釣りに出かけた。夕方といっても、午後二時頃には青森を発ち、早めに港に着く。我々の仕掛けはテンテンだ。中オモリをつけ、ゴムクッションをつけ、その下に一本枝針を出し、一番下にそのテンテンを取りつける。テンテンはオモリを兼ねた擬似餌のようなものだが、尻にちゃんと針をつけ、これでもかというほどのイソメを房がけにする。テンテン自体もそもそもいろんな色でできているのだが、前の方はナマリがそのまま見えている。これに、イワシだったり、イカだったりに見えるようにまた手を加えるのだ。

先頃、カレイ釣りの前に、まずタイをやってみようと、久しぶりにテンテンを取

り出してやってみたが、同じ船のひとりにはカブラとかいって、もうまるで別の世界の仕掛けにという感じだ。もつともテンカラは六〇七年ぶりに取り出して使ったのだった。時代はIT革命のように変わっているのだろう。

しかしNさんNさんで、行くたびごとに仕掛けのどこかを変えて進化させている。どこが有効なのか、私にははつきりわからないのだが、つまり日々研究している。

Nさんは、お父さんの代から、この船頭さんと付き合い、もう三十年は超えているだろう。Nさんは私に、何月の何日、何日と予定日を伝えてくる。ただその日は、ほとんど休日ではない。平日なのだ。会社勤めだった私にとっては、相当前から調整しておかないと、なかなか行けるものではない。Nさんはある会社の社長さんだ。いつてみれば勤務時間は自由にできる。それに合わせるのは、自分も自営業じゃないと、チョイとつらい。

でも、この船頭さんは、平日であろうがなんであろうが、この日の何時からの潮を使えば、タイ、ソイ、テンカラは釣れる日だと確信してNさんに日程を告げてく

るのだ。

この日を外すことは、休日しか行けないサラリーマン釣り師にとって、釣れない訳を考えてはいけない、そういう日程だと思えばいい。休んでも絶対に乗るべきだ。そういう船頭さんなのだ。

津軽半島の漁港に向かうとき、深夜の二時とか三時にNさんは私の家に迎えに来てくれる。私の家が途中にあるのでいつも申し訳ないが仕方がない。でも大抵の場合は、迎えの二時間も前から起きている。いやむしろ眠れないでいる。迎えの二十分前には、家の前を行ったり来たり、もう動物園の熊の状態になっているのだ。家の前の曲がり角で、約束の時間ごろ車のライトがピカッとこつちを向くと、Nさんの車と信じ「おお」と手を振ってしまふ。まあ間違いはない。

話を元に戻し、その日、つまり六月の中旬、七十歳近い社の先輩と、六十の私と、五十八のNさんと、五十四のMさんと四人で出掛けた。その年は先輩とはそれまでも数回、湾内のあちこちに行きカレイを釣っていた。そこで今度はソイ、テンカラ

釣りということになり、先輩を誘ったのだ。というのもIさんの船で前々週に、私は五十リッターのクーラーをほぼ満杯にしていた。だからその実績をもとに、七十近くの先輩を誘い、釣りに絶対はないのだが、ほぼそんな約束をし、その日の釣行となったのだった。

四時には出港なのだが、私の車で先輩を拾い、いつものNさんと一緒にパターンではなく港へ向かった。少し早めに着いた。追うようにMさんとNさんが着き、出港した。ソイ、テンカラ狙いだ。エサはどうしてもセグロイワシがいいと思うのだがなかなか手に入らない。市場などしょっちゅう見回っていて、たまにあっても腹わたが出ていて使えない。だから、四月か五月のうちから買い集め、塩で処理し、冷凍庫に貯め込んでおくようであればどうにもならない。オオバイワシとかはあるにはあるが、どうも食いが違うように思えてならない。

テンカラ用に上に六、七本の針にサバの切り身をつけ、下には孫針つきの二本のソイ用の胴付仕掛けを一体にして取り付け、その日は二百五十号のオモリで、まず

百四十メートルの深さに投げ込んだ。コツンと底にオモリがついて、そのままにしておくと根がかりになるから急いでほんの少し底を切るように巻き上げる。

すぐあたりがあつた。しかしすぐ上げたりはしない。テンカラだつたら、追い食いさせ、理想的には針の数分になつてから上げたい。

しかし欲ばっているうちに根がかりしてもと、もういいだろうと上げる。私にはソイ、背後のNさんにはいきなり大型のテンカラが五匹もきていた。いつもそうなのだが、Nさんの研究熱心さでいつもテンカラを私の三倍は釣る。何しろ、この船頭さんがNさんに仕事に使うテンカラ仕掛けを作ってくれと頼むくらいだから、仕掛けはプロ用のハンパな代物ではないのだ。精緻でいて、時に華麗で、しかも頑強だ。正確な寸法取り、どれをとつても一流だとわかる。

それに加えて人一倍熱心な船頭Iさんだ。このポイントといつたら間違いない。流されているうちに、ここから先はもう根が荒すぎてダメとか、あそこは大きいテンカラ、ここは小さいのテンカラ、どこは大きいソイ、ここはナガラ、どこはヒラ

メと、何の線もない海上で、何丁目何番地何号というような正確さで、狙っている魚種をいう。そして実際そうなる。GPSという便利なものがあつたにしても、漁師からすれば常識なのかもしれないのだが、ただただスゴイとしか言い様がない。

しかもこつちももう六十とか七十に近い連中だ。船の中を自由に走り回れない。三〜四メートルにも長くなつた仕掛けを放り込むにも釣座から離れて行つたり来たりするのもなかなか骨が折れる。Iさんは義経の八艘飛びよろしく、釣れた魚を針から外すのまでやってくれる。時には仕掛けを見るなり、「何釣るつもりで来たの」と鋭く突つこんでくる。つくりが細く青つちよろいのだ。懸命に「糸を巻け、ゆるめろ」と指示しながら、マツつたらマツつたで仕掛けをほどいてくれる。マツろうが、根がかりしようが釣り人の勝手とばかり、操舵室から首を出して、「ああ、またか」とやっている船頭などとはまるで違う。

絶対に笑顔で釣つて帰つてもらいたい、その思いがビシビシと伝わってくる。「底をとれよ、どんどん深くなつて行くから、糸を出せ、糸を出せ、底を取れ」

何度も何度も船中にこの言葉が響く。いきなり四十〜五十メートルも深くなる海底の段差がはつきりと魚探に映っている。

「ダメだ、糸出せつて、魚がないところに仕掛けぶらさげたって何もならねえべ」
キツイ言葉も繰り出す。

腹も減るのだが、ニギリメシを食う時間をもつたない。シヨンベンもたまつてくる。やつと暇を見て、船の最後尾に行き、縮み上がったアイツを引き出す。が、なかなかシヨンベンが出てこない。ぐつと腰をおろし、腹がドンと座ると覚悟ができたように今度はしつかり出てきて、ほんとサツパリする。

根がかりも何度もする。そのギリギリがソイの住処なのだから根がかりを恐れたいられない。根がかりでも、うまくはずれる時もあり、仕掛けごともつていかれることもある。オモリや仕掛けをもつたないと思ったり大事にしているは、目標の魚にエサは届かないのだ。ここが難しい。悩ましい。

かくて、その日の四人は全員大漁だった。それぞれが五十リットル以上のクーラー

を、ソイ、テンカラ、ホツケもきたし、ドンコもきたし、アブラメもきて、満杯にした。

帰りの車中、Iさんへの絶賛の言葉は止むことを知らない。

「ヨォー、Iさん、日本一！」

あらかじめ釣果に責任はもてないといったが、Iさんの船に乗るときだけは、行く前から釣れるだろう魚の配り先が、軽く脳の奥でルーレットのように回転し始めるのだ。

釣ったのだつたらうか。それとも釣らせてもらったのかは、おのずとわかるというわけだ。

平成23年2月